

## 研究論文 (Articles)

# 山形の子育て支援活動参加者における 「大人の発達」の検討

吉本 朋子<sup>1)</sup>・小森 伸子<sup>2)</sup>・高木 和子<sup>3)</sup>

(京都医療科学大学医療科学部<sup>1)</sup>・京都大学大学院文学研究科<sup>2)</sup>・立命館大学衣笠総合研究機構<sup>3)</sup>)

Adult Development on Participants to Parenting Support Groups in Yamagata

YOSHIMOTO Tomoko<sup>1)</sup>, KOMORI Nobuko<sup>2)</sup>, TAKAGI Kazuko<sup>3)</sup>

(Department of Medical Science, Kyoto College of Medical Science<sup>1)</sup>/ Graduate School of Letters, Kyoto University<sup>2)</sup>/ Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University<sup>3)</sup>)

Development of parents through parenting is one of the major themes of adult development. Those studies have focused on adults who change through bringing up their children. However, it has not been studied how parents, especially mothers who do not have a job, develop through interactions with other mothers. The purpose of this study was to investigate how mothers felt their growth through their interactions with other mothers while they were participating in the parenting support groups. In our preliminary study, the questionnaire for the participants in the support groups revealed that they recognized their growth in influence with other mothers, and that their perceived growth has diversity. To clarify their feelings, interviews with participants were conducted. The fifteen women were participants in the supporting groups and later managed the groups. The results indicated that there were three aspects of adult development: they felt their development through interaction with other adults; they felt that they took charge of their family and their community themselves; and they felt their own plasticity, namely, they could shift their priority, from “me-first” to “family-first”, from “family-first” to “me-first”.

**Key Words:** adult development, parenting support group, me-first, family-first

キーワード：大人の発達, 育児サークル, 自分優先, 家族優先

### 問題と目的

「大人の発達」が発達心理学において注目されるようになったのは、最近10年ほどのことである。「中年期のアイデンティティの再体制化 (岡本, 2007)」「高齢者の語り (守屋, 2005)」などの研究が進められている。成人期の発達研

究において特に行われているのは「親になることによる発達」である。子育ては親育てと言われるように、子育てをすることで保護者である大人自身が育っていくことはよく言われることであるが、その内実はどのようなものであろうか。例えば、柏木・若松 (1994) は、親としての自己成長感を「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生きが

い・存在感」「自己の強さ」という6次元からとらえ、親になることによって、特に専業主婦の母親で自己成長感を強く感じていることを明らかにした。また、その自己成長感に影響するものとして、母親の就業、教育水準等をあげている。

では、先行研究で示された「親になること」とは何を指しているのであろうか。自分の子どもを産み、育てるというライフイベントの変化は「親になる」ことの第一の条件であろう。しかし、子どもとの関係だけや、子どもを育てるという行為のみで成人は「親になる」のではない。自分の親や兄弟、独身時代からの友人、同じ年頃の子どもの持つことで親しくなった子育て仲間など、多くの大人の仲間たちが彼女・彼を「親」だと認め、また自分自身も「親である」ものとしてその人たちの中で振る舞うことで、「親になる」のではないだろうか。子どもを持ち親になることで社会と新たにつながり、そのなかで形成されていく「大人の発達」が成人期の発達にとって重要な位置をしめるのではないだろうか。

親になることによる発達研究においては、この周囲の大人との関わりに関する視点が不足している。例えば、澤田(2006)では、柏木らの質問項目を用いて親になることによる変化を明らかにしているが、アンケート調査を行う際「子ども(第1子)の誕生以前と比べて、(項目について)どの程度そう思うようになったか」という質問をしている。確かに子どもの誕生が契機となってその変化が生じたのではあろうが、誕生後の子育てに伴う変化なのかどうかという点が考慮されるほうが望ましいと考える。

育児サークルなどの実態調査(津止・藤本・斉藤・足立, 2003)からは、親の変化が、他の親との関わり、つまり大人どうしの関わりから生まれることを示唆している。例えば、他の親の子育ての仕方を見たり、親どうして悩みを共

有したり話し合ったりということである。「〇〇ちゃんのお母さんでない自分を出せる」ことにサークルの意義を感じる母親も多い。こうした感想は大人どうしの関わりがなければ出てこないものであろう。

また、人の発達には環境の影響を受けて個人が変容していく側面だけでなく、個人が環境に働きかけて環境を変容させていく側面がある。青年期までの発達は、個人が主として環境の影響を受けながら社会に適応して変化するという前者の側面が重視されている。これに対して、成人期になると個人が社会に影響を与え動かしていくという後者の側面が大きく加わる。つまり、青年期まで主に扱われる社会適応の発達から、成人期になると社会を運営する側としての発達を含んでいかなければならない。しかし、生涯発達のなかで後者の側面はほとんど取り上げられていない。これを入れこんで成人期の発達を考える視点が必要であろう。

われわれの研究グループでは、このような視点から子育て支援の場における参加者の育ちをとらえ(高木, 2004)、筆頭著者は京都市内3つの子育てサークルに参加している親に対する調査と子育てサークルでの継続的な観察を行ってきた(吉本, 2004)。子育てサークルの活動の中には、集団の場の中で母親・子ども・スタッフの一人一人と関わりながらの観察を継続して行ってきた。その中で子育てサークルに参加している母親が自分の子から注意が離れたたり、自分の子どもをおいて他の子どもと遊ぶという姿が見られた。このような様子から、子育てサークルの中で信頼できる大人と出会い、母子の関係から他の母親や子どもといった他者との関係が形成されていると考えられた。子育て経験でもあり、ある種の組織への社会参加経験でもある「子育てサークル」の活動を親どうしが交流し、大人が発達する場の一つとして捉えることができるであろう。

子育てサークルでは、子どもと大人の相互作用、大人どうしの相互作用によって、人々の発達が促されていると考えられる。子育てサークルの活動には、大人どうしが互いに育ちあいながら、大人によって子どもが育ち、子どもによって大人が育てられるという、同世代間と異世代間の相互性が認められる。これが子育てサークル参加者の「大人としての発達」をとりあげた大きな理由である。

母親が子育てサークルに参加し運営することによる育ちに焦点をあてることによって、母親発達を大人の発达到一般化できるようなかたちで取り出せないだろうか。子育ての様相は個人差が大きく多種多様であるが、子育てサークルへの参加者に対象を絞るだけで明確に見えてくるものがあるはずである。すなわち、「親としての」発達ではなく個人として「変化した・育った・発達した」という自覚を唯一の手掛かりとして、母親発達だけではなく大人の発達に対しても新しい視野をもたらせるのではなかろうか。

子育て期の大人の発達を考えると、自分を主張するだけでなく、周りの人たちに合わせることで自分を生かすような関係の重視が自覚されるのではないかと考え、本研究で調べてみることにした。また、周りの人との関係の持ち方を自分で変化させることが可能なのではなかろうか。

まず、子育てサークルに参加している個人を対象にアンケート調査を行い、大人どうしの関わりがあるのかどうかを調べる。また、サークルに入ったことによる変化を検討し、変化に大人どうしの関わりが関係している可能性を探ることにする。

## 調査 I

### 育児サークル参加者へのアンケート調査

#### 目的

現在子育て中のサークル参加者に対して、育児サークルというコミュニティにおける参加の形態を調べ、大人どうしの交流による発達が自覚されているのか、大人になってからの周囲との関係の持ち方に変化がみられるのかを調べた。

山形で調査を行ったのは、核家族の多い都会に比べて三世代以上の同居家族が多く、都会の場合とは異なって相互性がより重視されている可能性があるかもしれないと考えたからである。また、大都市近郊のデータが多い現状の偏りを少なくしたいと考えたことによる。

#### 方法

##### 調査対象

山形市内の9つの子育てサークルに参加している20代から50代の養育者であった。

##### 調査方法

自記入式による調査であった。サークルを通じて個人に配布を行い、サークルのごとにまとめて回収された。回収数は229であり、回収率は91%であった。

##### 調査時期

2005年2-3月に行った。

##### 調査項目

養育者の背景情報に関するもの（職業や同居の有無など）の項目と子育てサークルに関するもの（サークル参加のきっかけや期待、活動状況によるもの）として、大きく7つの項目が設定された。

I. 調査対象者の基本属性

II. 子育てサークル参加のきっかけ・活動によ

る自分の変化

- Ⅲ. サークルへの期待
- Ⅳ. サークルでの活動状況
- Ⅴ. サークルでの対人関係の葛藤に関する項目
- Ⅵ. 参加者自身のライフコースに関係した項目
- Ⅶ. 本調査に対する意見や感想

## 結果と考察

### 1. 調査対象者の属性

全員女性であった。年齢は30代が最も多く(66%)、次いで20代(27%)、40代(5%)の順であった。家族形態は核家族が全体の66%を占め、次に三世代同居が多かった(29%)。山形県内での居住年数は30年以上が29%、5年以内が27%、20年から30年が21%であった。また調査対象者の夫の31%が転勤族であった。

### 2. 調査対象者自身のライフコース

以下の調査結果から対象者の特徴を抽出した。

学歴：短大・専修学校卒(40%)が最も多く、高校卒(38%)、大学卒(18%)の順であった。学生時代に目指した職業があったと答えたのは42%であり、具体的な職業名として保育士・教員・看護師・幼稚園教諭などがあがった。

就業の有無：93%が学校卒業後に何らかの職業についての経験があった。期間は平均6.1年であった。退職経験者に関してそのきっかけを聞いたところ、「結婚」(43%)、「子ども誕生」(40%)が最も多く、「個人の事情」(9%)、「家族の事情」(8%)が続く。現在仕事をしているかどうかについての質問には、80%が「していない」と回答していた。

上記の結果から、多くは高卒以上の学歴を持ち働いた経験があるが、現在は専業主婦であると考えられた。

### 3. サークル参加の目的・期待

サークル参加の目的は子どもの仲間づくり(66%)が最も多いが、母親同士の仲間づくり(32%)も見られ、母親自身が大人である母親との交流を望んでいる面もあるようであった。

### 4. サークル活動による自分の変化

調査対象者の97%はサークルに入ったことで子育てによい影響、人間関係によい影響があったと回答していた。自由記述からは「友達づくり」という子どものためのものの他に大人どうしの可能性もある記述が最も多かった。また自由記述にみられる「人との交流」は子どもどうしというより大人どうしの方が中心になっていると考えられる。「情報交換」も大人どうしの交流にあたりと考えられる。この結果から、大人どうしの交流がサークル内で多く行われ、それに関して肯定的な評価をしている様子が見えられた。

サークルに入る前後の自分と他者との関わりの変化をとらえるために、「学生時代に目指した職業があったかどうか」と「サークル内で役職を引き受けたことがあるかどうか」の2つの質問項目の回答結果をもとにクロス集計を行ってみた。この2つの質問項目の内容はどちらも、自分が主体的に関わったか否かを訊ねており、社会への積極性の指標の一つとして利用できると考えた。クロス集計の結果、表1に示すように、まず4種類のグループの人たちがそれぞれ20%から35%という高い割合で存在した。「目

表1. 学生時代と育児サークルにおける積極性で分けたグループごとの人数

		役や係の経験		合計
		あり	なし	
学生時代の目標	あり	62 (35%)	35 (20%)	97
	なし	41 (23%)	40 (22%)	81
				178

指した職業は無かったが、サークルで役職を引き受ける人」（促進型）、「目指した職業はあったが、役職は引き受けたことがない人」（抑制型）という、積極性に変化のみられる人達は発達の変化という点で重要であるので、次いで促進型と抑制型の人達についてすべての調査項目の回答から特徴を調べてみた。

促進型と抑制型それぞれの特徴を調べた結果、表2にある調査項目において $\chi^2$ 検定で5%以下の有意差がみられた。まず、促進型は参加年数が長く、年齢も高い。育児サークルリーダー向けの研修会にも多くの人が参加し、対人関係での悩みをもった経験がある人が多い。また、専業主婦を経験したことによって価値観が変化したと答えた人は促進型で多くみられた。参加年数が長いということは、多くのサークル参加経験を持ち、そのことが彼女らを役職につかせる原因となっているとも考えられる。リーダー研修会とは、育児サークルのリーダーたちがサークル運営についての経験を交流したり、

表2. 促進型と抑制型の質問紙から見た特徴

質問	回答	促進型 (41人)	抑制型 (35人)
年齢	20代	7 17%	14 40%
	20代以外	34 83%	21 60%
サークルへの参加年数	5年以内	17 41%	23 66%
	5年以上	24 59%	12 34%
リーダー研修会への参加	経験あり	20 49%	2 6%
	経験なし	21 51%	33 94%
対人関係の悩み	あり	12 29%	3 9%
	なし	29 71%	32 91%
保育・教育の仕事経験	あり	1 2%	14 40%
	なし	40 98%	21 60%
主婦経験による価値観の変化	あり	29 71%	17 49%
	なし	12 29%	18 51%

数字は人数。割合は各グループに占める割合

ヒントを教えあったりする定期的な会合であり、大人どうしの関わりである。また、対人関係の悩みに関しても、子どもというより大人との関係によるものであろう。

育児サークル参加者へのアンケート調査結果から、まず、サークル活動による自分の変化についての自由記述の回答として、育児サークルに入ってよかったことに「人との交流・情報交換」という大人どうしでなくてはできない感想が見られ、子どもがいる大人どうしの交流があるといえる。育児サークルは子どもどうしが友達となるだけでなく、大人どうしの交流の中で大人が育つ可能性がある場所であり、それを大人自身が肯定的にとらえていることが明らかになった。

次に、促進型と抑制型の比較から、サークルに入ってから積極的に関わるようになった人達は、サークルに対しての関与度が高く、また様々な体験をしているということが示唆される。その経験は勿論子どもの成長に伴うものもあるだろうが、調査項目で差がみられた項目は、大人どうしの交流（対人関係の葛藤など）を示すものであった。ここから、大人どうしの交流も変化と関連する可能性が得られた。

また、積極型・促進型だけでなく、サークルに入っても積極的に関わらない消極型・抑制型の人もあることから、サークルに入ることによる変化は一方向ではないこともわかる。柏木ら（1994）の調査でも、「分をわきまえるようになった」「協調が大事だとおもった」という項目がある反面、「ちゃんと自分のことは主張するようになった」という一見すると矛盾する項目もみられ、親になることによる発達の多様性が示されている。

## 調査Ⅱ

### 子育て支援事業運営参加者へのインタビュー調査

#### 背景と目的

著者らの研究グループでは、子育て支援の運営側に参加するようになった人たちと関わり合う機会に恵まれた。この人達を調査することで、「大人の発達」の内実をより明らかにできると考えた。具体的には山形市内にある「特定非営利活動法人 やまがた育児サークルランド」が運営する「子育てランドあ〜べ」で働く子どもを持つ女性15人へのインタビューを行った。

「あ〜べ」の出自、運営方法に関しては高田(2005)がまとめているが、最初は各自の子育ての際に作ったサークルで活動していたが、その内にサークル間の連携や協力体制作りをになうようになり、NPO法人を立ち上げ運営に関わるようになった人達である。「あ〜べ」の活動の特徴は、①自分たちの子育てをしながらお互いに支えあう「育児サークル」の立ち上げから、活動を運営するためのリーダーの力をつけていく必要に着目し、他のサークルにも呼びかけて研修をおこなってきたこと、②地域社会との連携を取ることで事業が拡大し、「社会の組織を運営していく力」を必要とされる局面を経験していることが挙げられる。また彼女達は運営上の役割を何らかの形で引き受けていることから、調査Ⅰにおける「積極型」又は「促進型」と考えられる。運営に参加している彼女らは、受け身のサービス享受者ではなく、支援に参加する能動的な人達である。アンケート調査からも、促進型へ変化した人達は、サークルにおいて役や係を経験する、つまり能動的に関わる人が多いことが明らかになっている。能動的に関わる「あ〜べ」のスタッフを調査することで、大人どうしの関わりによる「大人の発達」の内容がより鮮明にあらわれるであろう。

調査Ⅱにおいては、「あ〜べ」の活動の運営に参加している女性たちへのインタビュー調査を通して、「子育て支援活動」に参加することで得られる「大人の発達」の過程を捉えることを目的とした。著者らは2004年に「あ〜べ」の運営参加者15名に対するインタビューを行ったが、その中で自分と家族のどちらを優先するか意識について質問をしたところ、優先意識によって職種（保育と事務）が分かれるという興味深い結果が得られた。そこで2006年にも2回目の調査を行って、「大人の発達」の可変性について検討した。なお、本調査の一部は吉本(2005)にまとめられている。今回は大人どうしの関わり、つまりあ〜べの運営に参加することが彼女たちにとってどのような意味を持ち、それが育ちの自覚の変化と関係しているのかを問題とした。

#### 方法

質問紙による予備調査で、成育歴、やまがた育児サークルランド「あ〜べ」での活動参加様態と参加年数、活動による自己変容等の情報を得たうえで、15名の運営参加者に半構造化面接を2004年と2006年に行った。インタビュー前にインフォームドコンセントを口頭で十分に行い、同意を得た上で調査を行った。スタッフ15名の内、2004年、2006年の両方に参加したのは10名であった。(面接内容の概要、調査対象者の基本的な属性は、高木・吉本・常光・小倉(2005)を参照。)

#### 結果

あ〜べのスタッフは、主に、経理や日程調整、交渉といった事務的な仕事を担う人達と、託児などの子どもと直接関わる保育系の仕事にわかれる。その仕事の選び方は彼女たちの以前から

の経験などから決められている。吉本ら(2005)において、質問項目への回答の違いがあ〜べでの職種の違い（事務と保育）と対応しており、保育スタッフの8名と事務スタッフの7名はそれぞれライフコースにおいても似通っていることが示されているため、本研究においても、あ〜べでの職種別（事務と保育）の分析を行った。

表3 大人としての育ちの実感（15人のプロトコル）

- 
- 1 年齢、環境の違う人たちから刺激をもらっている
  - 2 時間の使い方を考えるようになった、人間関係の広がり
  - 3 時間のメリハリ、前向きさ、人に触発される
  - 4 背景の違う人たちからの刺激、前向きさ
  - 5 充実感・自信
  - 6 子どもにもやさしく接している・生き甲斐を感じる・プロ意識
  - 7 人の子だけでなく自分の子どもにもやさしく接しようと思うようになった
  - 8 頭を多く使う以前とは格別の忙しさ、手抜き料理が多くなった。時間の使い方が上手になった。1日24時間ではたりない、体がふたつ欲しい。
  - 9 考えていることを実現できているので、時間的に大変な時もあるが充実している
  - 10（全体）多様性を受け入れられるようになった。人間の幅ができた変化が自分の中で一番大きい。
  - 11 いろんなことにチャレンジ、一生懸命がんばる。
  - 12 なんとなく過ごしていた毎日から、やらなければいけないことがたくさんあり充実した毎日になった。
  - 13 1人1人の力を結集することで問題を解決できる手だてを知ることができ、どんなことでもやってみることが大切であるということを知った。
  - 14（全体）子ども中心の生活から自分の時間の割合が多くなった。同年代の集まりなのでいろいろな影響されることが多い。子育てに（自分以外の）に関して目を向けるようになった。
  - 15 専業主婦だったのが今では常勤。時間の使い方が変わった。家事はちょっと手抜き。効率を考えるようになった。
- 

表4 子育ての仕方の変化の内容（15人のプロトコル）

- 
- 1
  - 2
  - 3 自分でできることは自分でさせる
  - 4
  - 5
  - 6 仕事に生きがいが出てきたので、子育てにもはりあいがでた。
  - 7
  - 8 いろんな視点から子どもと向き合えるようになった。
  - 9 視野が広がった。
  - 10 子育てに関する知識を持つことができ、子育ての仕方よりよい方向へ進化している思う
  - 11
  - 12 祖母には食事の準備や洗濯など家事をしてもらうようになった。
  - 13 個人では知ることのできない多くのことを知ることができた
  - 14 いろんな意味で周りのスタッフの影響（子育て）を受けていることが多い
  - 15 子育ての方法もいろいろあることを学ぶことができた。
- 

空欄は無回答

I. 大人としての育ちの実感についての回答の分析：2004年に行った15名のプロトコルを表3にまとめた。また子育ての仕方の変化についてのプロトコル（2004年）を表4にまとめた。

表3, 4からは大人としての育ちの自覚が伺えるが、その内容は、「人間の幅」「年齢・環境の違う人達から刺激をもらっている」といったものがあり、大人どうしの関係を伺わせる発言であった。「子育ての方法もいろいろあることを知った」という発言は、他の親をみての発言だと考えられ、ここでも変化に大人との関わりがあることを示している。

II. 自分優先・家族優先に対する回答の分析：「あなたがやりたいことをやっていくこと」と「家族全体としてうまくやっていくこと」とどちらが大事ですか、家族全体の都合とあなたのやりたいことをどう折り合いをつけていますか、と尋ねた。返答のプロトコル内容を分析した。

2004年の調査結果では、事務スタッフ(7名)のうち、自分優先が3名、自分と家族の両方が2名、参加したことで、家族優先から自分優先に変化したと答えた人が1名で、家族優先と答えた人はいなかった。保育スタッフ(8名)のうち、自分優先から家族優先へ変化した人3名、家族優先1名、両方3名であった。家族優先から自分優先に変化したと答えた人はいなかった。2004年の調査では、事務スタッフは自分優先の意識が強く、保育スタッフは家族優先の意識が強いという違いが見だされた。

さらに、語りのプロトコルから、自分が家族などの集団の関係性を動かしたと意識している自発的発言を取り出してみた。

(H) うちの都合で、おばあちゃん、おじいちゃんがこうだから私はできないと思ったこともあった。食事時間で、以前はおばあちゃんたち

に出す時間を気にしていたが、話をして今は別に食事している。

(J) (これまでの親兄弟の人間関係を述べて、) 両親の面倒がみられるようにその近くに自分たち家族の家を建てることにした。

(O) 住んでいたアパートで通勤族の人に子供を預かってあげたいと声をかけても拒否された。グループや組織があればできる。それで、子育て支援組織に参加した。

(K) 子供が生まれても夫は野球をして楽しんでいた。「今はそれでいいけど、子育てが一段落したら私も好きなことをするからね」と言い続けてきた。私が活動をするようになって、夫は文句を言いたそうな顔をしていたけど、言いはしなかった。活動をするようになって、夫が夕食の後かたづけをしてくれる。今までには考えられなかったこと。

(L) 夫の両親が歩いて10分くらいのところに住んでいる。何かあれば子どもたちがそちらに頼るよう、協力を頼んだ。快く受け入れてもらった。

(M) 同居して働いていない専業主婦は肩身の狭い思いをしている。回覧版も見せてもらえない。家の外へ出にくい。子どもにあたる。赤ちゃん広場にもそういう人に来てほしい。

(I) 自分はあ〜べへ。今は土曜夫が家事をしてくれる。

(a) 3年半後に舅が亡くなって、一周忌が終わったとき、「今までは家族を優先したけど、これからは自分のやりたいことをする」と家族全体に相談した。40歳で、サークルランドを優先したいと宣言した。夫は決して望まないが、いやいやながら協力していると思う。家族のありように変化があってよかったと思う。

以上に示したとおり、保育スタッフの人たちのほうが自分が集団の関係性を変えたと意識した自発的発言が多かった(HJOKLMIの7名)。

事務スタッフの人たちでそのような自発的発言があったのはひとりだけ（a）であった。

### Ⅲ. 自分優先・家族優先の回答の変化の分析：

自分と家族の優先意識の返答のプロトコル内容を分析し、2004年と2006年の結果を対象者ごとにまとめた（図1）。あ～べのスタッフ10名のうち6名は、自分と家族の優先意識に変化があったと答えていた。家族優先への変化が4名で、自分優先への変化は1名であった。優先意識に変化がなかった人は4名であった。

図1で事務スタッフをみると、2006年には家族優先と答えた人が7名中3名いた。これは2004年の調査時と比較して大きく変化している点である。

以上から、調査対象者数が少ないため断定はできないが、優先意識が変化するという可能性が示唆された。

### Ⅳ. 大人としての育ちの実感の変化：「大人として自分が育っていると実感したことはある

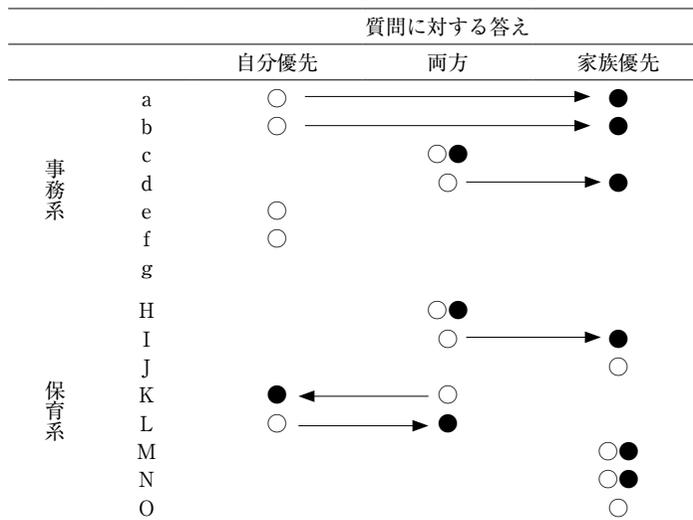
か」という問いかけに対する2006年の返答のプロトコルを以下にあげる。かっこ内のアルファベットa—g H—Oは2004年の調査を行った人で、（現在の仕事／2004年の優先意識）を記載した。下記のrとtは2006年のみ調査を行った人である。

（H 保育・コーディネーター／両方）順序たてて話す。それが自然にできている。子育て中のお母さんとお話してほっとした顔をされたとき（成長したと感じる）。

（K 保育・コーディネーター／両方）考え方は昔よりおおらかになった。いろんなことが話せるようになった。いろんな人を見ることでいろんな生き方がある。

（L 保育・総務／自分優先）子どもが生まれる前は自分中心だったのが、家族から自分が求められていることを意識するようになった。

（a 理事・総務／自分優先）育児サークルの情報交換の時、一支援者としての目が育ってきていると感じる。今の20才くらいのお母さんから学ぶことも多い。多様性を日々学ばせていただいている。ここだけじゃない社会があるんだと気づく。



注) ○ 2004年 ● 2006年  
 図中のアルファベットは本文中の人物を表すアルファベットと対応している。

図1. インタビューにおける家族優先・自分優先の回答の変化

(N 託児・受付／家族優先) 組織にいたときはちがう自分が育っている実感がある。

(b 理事・総務／自分優先) 人とのつきあいを上手にできるようになった、きれいな人でも。

(c 理事・会計／両方) 他人から見たらわからないけど自分の中では成長したと思います。仕事の時、男性がほとんどの職場にいたが、ここにきて女性だけの職場で荒波をくぐりぬけてきた。

(d 総務／両方) 今となってみれば子どもを産んだこと(そのときは思わなかったかもしれない)成長せざるをえなかった。

(r) 子どもを産むことで成長した。1人目より3人目の方がうまく対応できている。先が見えてくる分、育児についても習得したものがあつた。

(t) 失敗にも次にいける気力を自然に身につけた。子どもを見ていると「子どもって強いなあ」と感じる。人とのつき合いで臆する部分があつたが、マイペースでやっていけばいいかなと思うようになった。

これらの回答においても、「いろんな人を見ることで」といった、大人が原因だと考えられる発言がみられる。「女性だけの職場」という、親としてより職業人としての関わりが意識された発言も見られた。

### 考察

あ～べのスタッフの調査結果からは、彼女達が、子育てサークル参加者調査の結果のように、人間関係や視野の広がりを見覚するようになったというだけでなく、自分が家族などの集団の関係性を動かしたという、システムの担い手としての自分を意識していることがわかる。

保育スタッフの人たちは、自分優先から子どもの誕生などを契機に家族優先に変化したり(MNO)、結婚当初から両方とも大事と感じて両立させようとしていた(HKI)。彼女らが自分より優先させている家族とは、自分が作った家族のことである。一方、事務スタッフの人た

ちは、自分優先または両方大事であると答えていた。唯一かつて家族優先だったと答えたaさんが優先させた家族とは、夫の両親を中心としたものであり、夫や子どもという、自分で作った家族のことではない。事務スタッフは2004年の調査では自分優先の意識が強い。かつては人に指示されて従属的な仕事をしていたが、現在あ～べの主体的な運営に、家族より自分優先でとりくんでいる。このような「個形成型」とよべる「大人の発達」の姿があると考えられた。

教員・保育士の経歴をもつ保育スタッフの人たちは2004年・2006年ともに家族優先の意識をもつ人が多いが、かつて教員・保育士のころは自分優先の時期があつた。学生時代になりたい職業をもっており、最初の就職のときには自分や自分の仕事を中心にしていたのだが、それが仕事を続けられなくなって中途退職し、専業主婦を経験していることが同じ聞き取り調査からわかっている。子どもを持ったことを契機に、自分優先だった人が家族優先に変化し、自分と家族の対人関係を調和させようとしつつ、対人関係重視の職業経験を生かして活動にとりくんでいる。このような「関係形成型」ともよべる「大人の発達」の姿もまた考えられた。

自分と家族の優先意識の違いからは、自分優先から家族優先の方向へも変化するという双方向の可変性がある可能性が示された。またその変化には、家族関係のライフイベントが大きく関わっている可能性がある。優先意識の変化に大人どうしの関わりがどう関係してくるのかは今後の検討課題である。

大人としての育ちの実感の返答プロトコルを詳しくみると、あ～べのスタッフ(運営参加者)は、きれいな人とつきあえるようになったなど、大人どうしのつきあいを通じて自分が変わったことを挙げていることがわかる。また、あ～べのスタッフは、仲間から刺激を受けたと

いった受身の実感にとどまらず、主体的に活動して自分が変わったという実感を具体的にもっていることがわかった。

本研究から、子育て期の「大人の発達」は、他者との関係によって自分が他者を変えられる（あるいは影響を与えられる）という自覚（エージェントの感覚）が関係していると考えられる。自己も他者も社会も可変性のあるものとして感じられて、それを肯定的に受け止めている。そして、子育ての親子関係によって大人が発達するだけでなく、子育てを通じた大人どうしのつきあいによって大人が発達している、という可能性が示唆された。

今回調査したサークル活動参加者や運営者は、会社や組織の中で働き続け、保育園などに子どもを預けながら子育てをするという人達ではなく、専業主婦になり家庭を中心とした子育てを（現在または過去）行っている人達であった。こうした人達は家庭と子どもの周辺だけで生きている、また自身の大人としての成長、発達も子ども、子育てを通じてだけだと思われがちである。しかし本調査の結果は、子育てを通じて新しい大人どうしの関係が構築され、その中で自分が成長し、それを実感しているという姿が浮かび上がってきた。今後は上記の調査結果から得られた「大人の発達」を参考に、実証的なモデル作りとその検証を行いながら、成人期の発達について研究していきたい。

## 引用文献

柏木恵子・若松素子（1994）「親になる」ことによる人

格発達：生涯発達の観点から親を研究する試み、  
発達心理学研究, 5, 72-83.

守屋慶子（2006）中・高年期からの心理的発達—「適応」から「創造」へ—, 立命館文学, 1050—1066.

岡本祐子（2007）「アイデンティティ生涯発達論の展開  
中年期の危機と心の深化」, ミネルヴァ書房.

澤田忠幸（2006）既婚女性のwell-beingと親となる意識  
の発達—夫婦関係との関連から—, 家族心理学研究,  
20, 85-97.

高木和子（2004）子育て支援をめぐる「支えあいの輪」  
の機能, 立命館人間科学研究, 7, 3-12.

高木和子・吉本朋子・常光真梨子・小倉直子（2005）  
山形の子育て支援活動運営参加者における「大人の  
発達」の検討（1）—本研究の視点と活動の運営  
形態と対象者についての概要—, 日本発達心理学  
会第16回大会発表論文集, 619.

高木和子・吉本朋子・常光真梨子・小倉直子（2005）  
子育て支援に取り組む大人の発達—やまがた育児  
サークルランドの運営参加者を対象として—, 学  
術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリー  
ズ, 13, 立命館大学人間科学研究所.

高田薫（2005）あへべの歩みと今, 学術フロンティア  
推進事業プロジェクト研究シリーズ, 13, 立命館  
大学人間科学研究所.

津止正敏・藤本明美・斉藤真緒・足立陽子（2003）  
「子育てサークル共同のチカラ—当事者性と地域福  
祉の視点から—」, 文理閣.

氏家達夫（1996）「親になるプロセス」, 金子書房.

吉本朋子（2004）育ちあう個と集団の相互作用過程—  
子育てサークルの親を中心に—, 立命館人間科学  
研究, 7, 25-34.

吉本朋子・高木和子・小倉直子・常光真梨子（2005）  
山形の子育て支援活動運営参加者における「大人の  
発達」の検討（2）—面接調査の結果から—, 日  
本発達心理学会第16回大会発表論文集, 620.

（2007. 10. 1受稿）（2007. 12. 5受理）